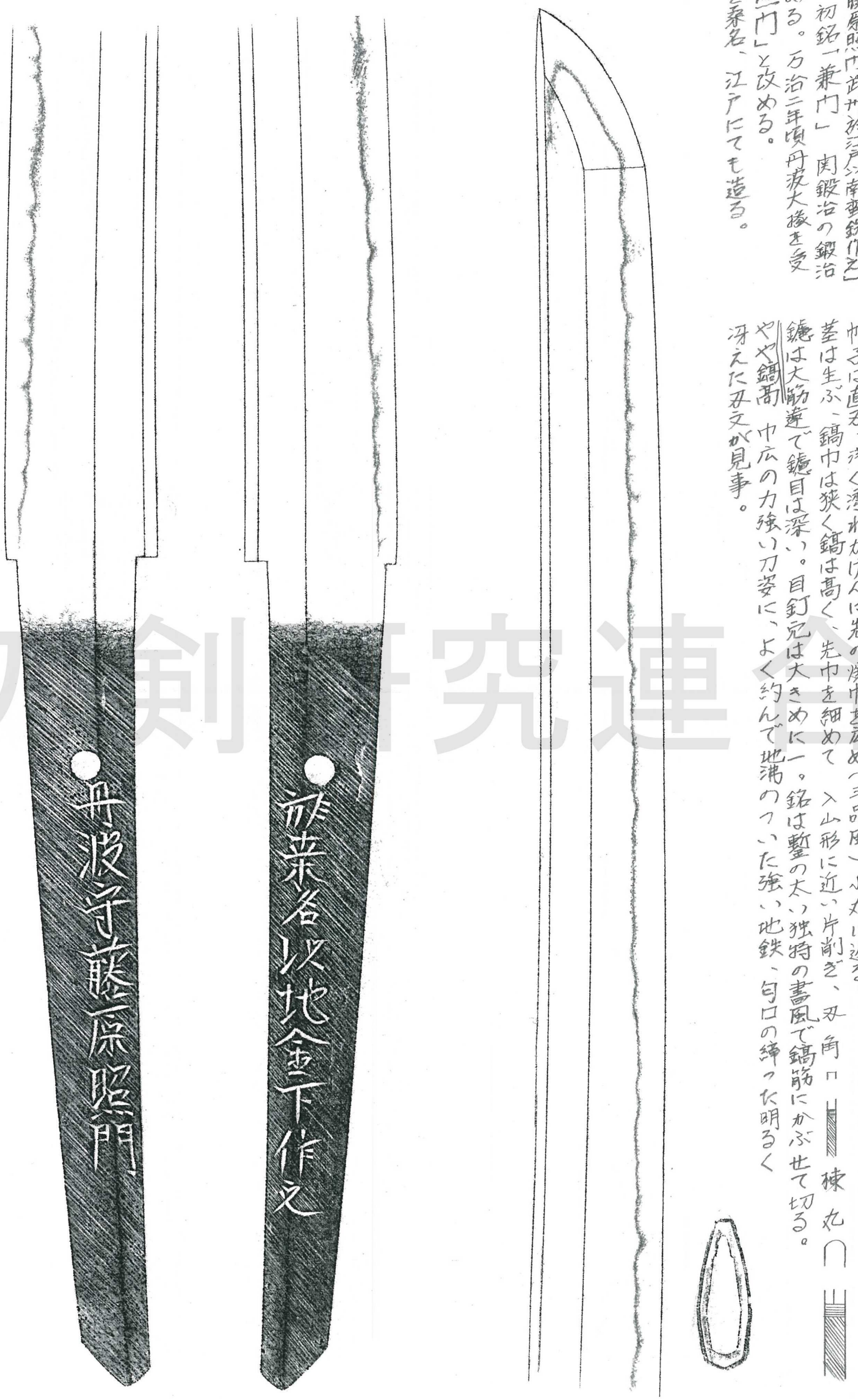
刀　丹波守藤原照門
於来名以地鉄下作之

美濃　　賞文

「丹波大掾藤原照門」
「丹波守藤原照門」
「丹波守藤原照門於関以南蛮鉄作之」
「丹波守藤原照門於桑名以地鉄下作之」
「丹波守藤原照門武州於江戸以南蛮鉄作之」

宗九郎　初銘「兼門」　関鍛冶の鍛冶頭を勤める。万治二年頃丹波大掾を受領して「照門」と改める。
美濃関と桑名、江戸にても造る。



鑑定刀

平成二十八年五月二十日

刀長	69.4cm（二尺二寸九分）	反り	1.36cm（四分五厘）	元巾	3.36cm（3.22cm）
元重	0.78cm（0.52cm）	先重	0.52cm（0.38cm）	切先長	3.92cm
				先巾	2.41cm（2.28cm）
				茎長	19.2cm（19.6cm）
				茎反り	0.1cm

鎬造、庵棟高く、鎬巾は狭めで鎬は高く、棟の重ねは薄めで身巾の広い造込みとなり、元巾と先巾の差は少なく、切先は中切先でフクラは張る。反りは中間反りが浅め。
地鉄は小板目に小杢を交じえて約み鎬地は柾が交じる。地沸がつき、細かな地景が交じる。
刃文は直刃に互の目、中程より下は浅く湾れが交じり、刃中は足がよく入り、匂口は締りかげんに明るく冴える。
帽子は直刃、浅く湾れかげんに先の焼巾を広め（三品風）小丸に返る。
茎は生ぶ、鎬巾は狭く鎬は高く、先巾を細めて入山形に近い片削ぎ、刃角口　棟　丸
鑢は大筋違で鑢目は深い。目釘穴は大きめに一。銘は整の太い独特の書風で鎬筋にかぶせて切る。
やや鎬高　巾広の力強い刀姿に、よく約んで地沸のついた強い地鉄、匂口の締った明るく冴えた刃文が見事。

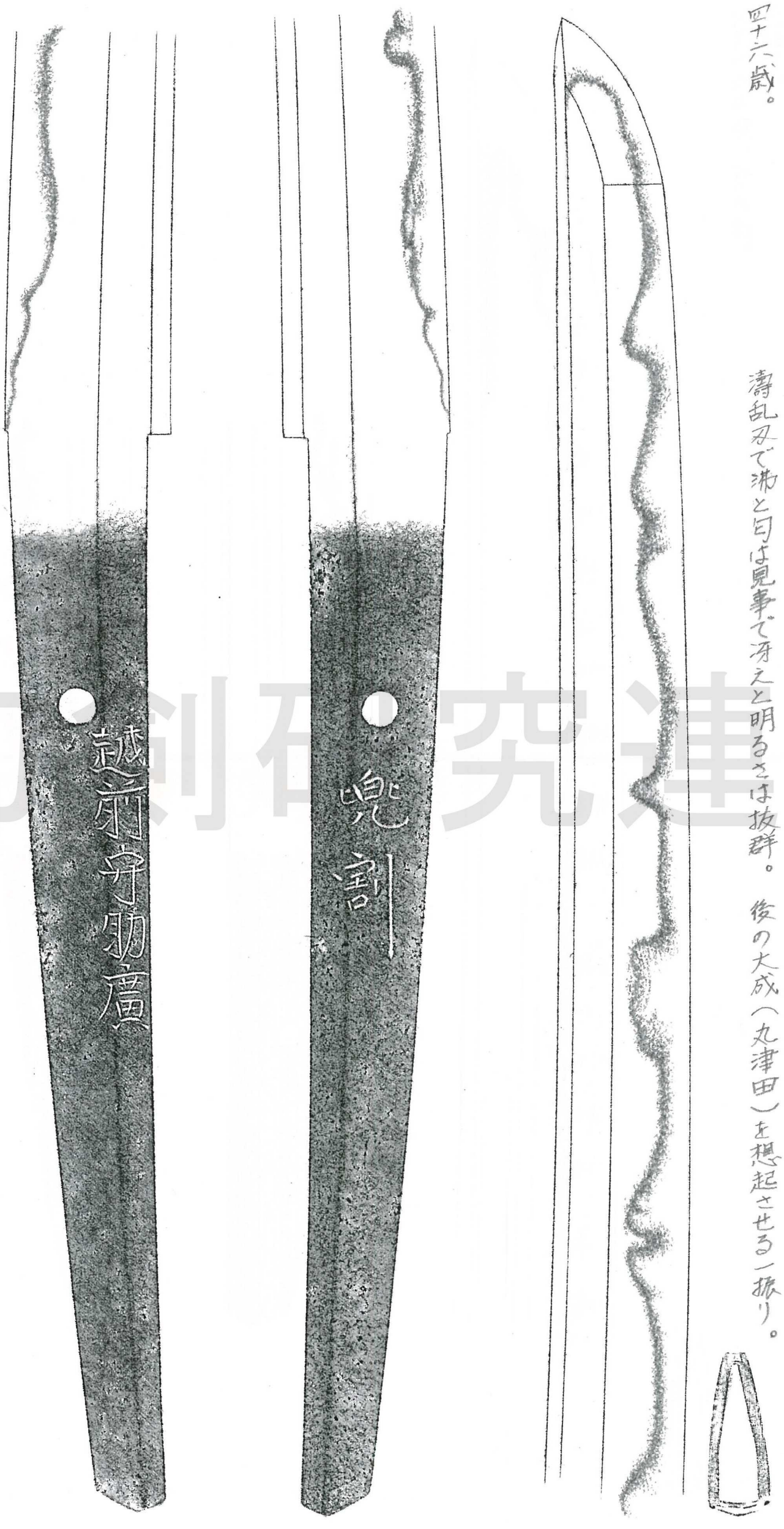
刀剣研究連合会

刀　越前守助廣

兜割

摂津　　貫文

津田甚之丞、摂津常盤住。寛永十四年（一六三七）摂州打出村に生れる。初代助廣門人となり後に養子。明暦三年（一六五七）越前守を受領。貫文七年（一六六七）八月から裏年紀を草書で切る。この頃より化粧鑢をかける。延宝三年（一六七四）から表裏ともに早書で銘を切る。天和二年（一六八二）三月十四日没。四十六歳。大業物。



平成二十八年五月二十一日　　鑑定刀

刃長 68.9cm（二尺二寸七分三厘）　反り 1.54cm（五分一厘）　元巾 3.15cm（2.98cm）　先巾 2.07cm（1.98cm）

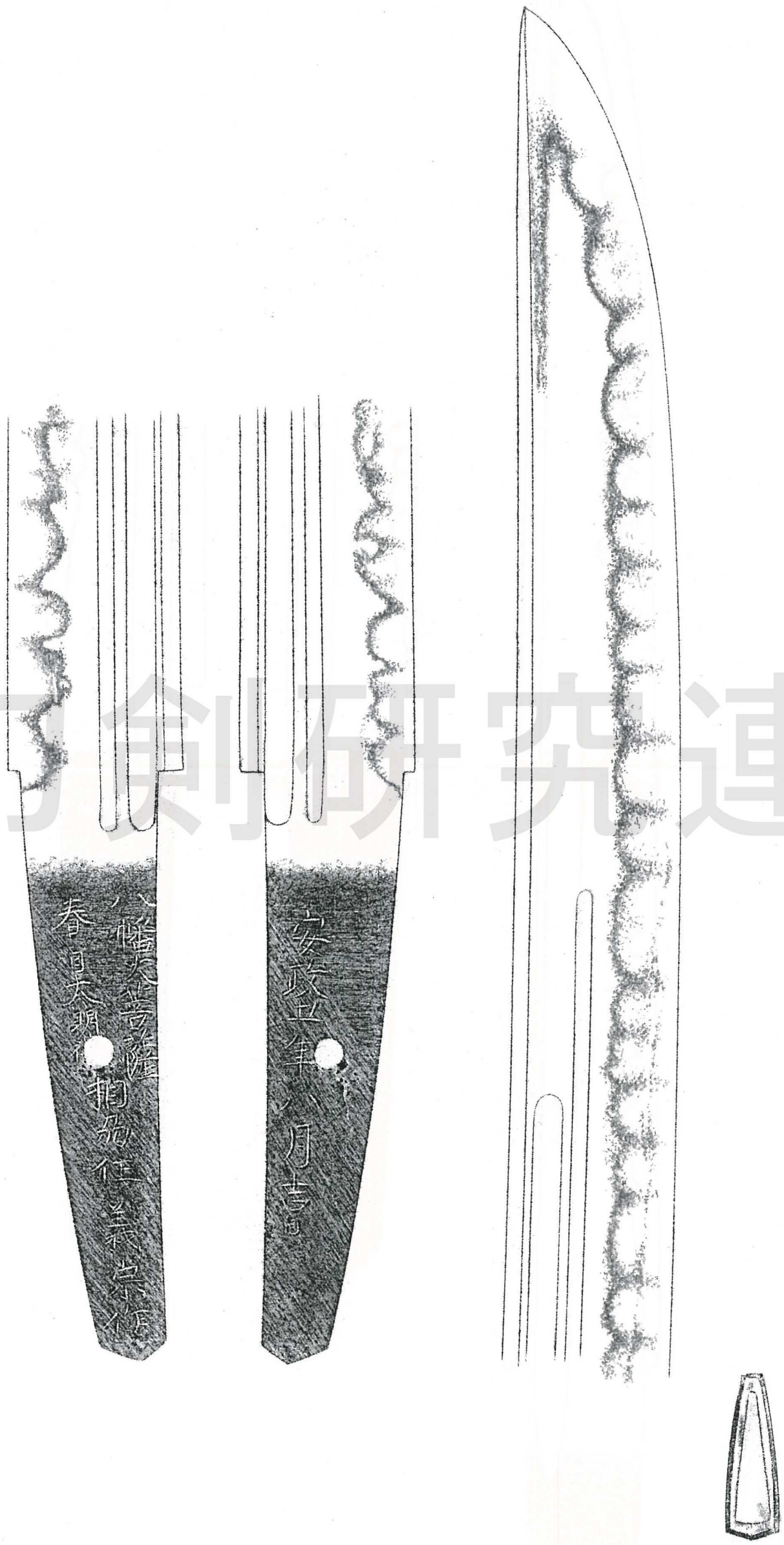
元重 0.77cm（0.73cm）　先重 0.58cm（0.50cm）　切先長 3.46cm　茎長 22.2cm（22.5cm）　茎反り 0.08cm

鎬造、庵棟低め、鎬巾は尋常で鎬は低く、重ねと身巾の尋常な造込みとなり、元巾と先巾の差は頃合いに南き、切先は中切先でフクラは張る。反りは中間反りが尋常。　地鉄は小板目がよく約んで鎬地は柾が交じり、地沸が厚くついて細かな地景が底に沈み、地色は青黒く明るく冴える。　刃文は湾れに互の目、表裏の刃がよく揃い互の目の頭は丸く、角張り、尖り気味の刃が交じり（濤乱刃の初期）焼出しは小湾れで焼く、刃中は太い足が入り、匂は深く沸は厚く明るく冴える。　帽子は直刃、先はわずかに掃けて小丸に返る。　茎は生ぶ、鎬巾は尋常で鎬は低く、長寸で先巾を狭め入山形、刃巾の狭い小丸 ═ 棟 小丸 ═ 鑢は化粧鑢　磨出しは切で下は筋違い。目釘穴は一、銘は鎬地に切る（角津田）。　地鉄の鍛えは良く、明るく冴えて澄明度が高い。刃文は初期の濤乱刃で沸と匂は見事で冴えと明るさは抜群。　後の大成（丸津田）を想起させる一振り。

刀剣研究連合会

脇差　八幡大菩薩
春日大明神　相州住義宗作
安政五年八月吉日

○武蔵　天保
「富士近江源義宗」「駿州住富士源義宗」
「彦根住義宗」
細川正義門人。本国駿河のち江戸住。
○別に「奥州住源義宗」
陸奥国白川住。　文久。
島田義助の「義」の一字をもらい
五条義宗と銘す。
明治二十九年正月十九日没。五十九歳。



鑑定刀

平成二十八年五月二十二日

刀長 39.4cm（一尺三寸）　反り 0.45cm（一分五厘）　元巾 3.19cm　元重 0.64cm　茎長 11.2cm（11.7cm）

茎反り 0.05cm　茎元巾 2.76cm　茎先巾 1.37cm　茎元重 0.62cm　茎先重 0.41cm

平造、庵棟尋常、重ねは尋常で身巾の広い造込みとなり、フクラは拓れかげんで、反りは中間反りに先反りを加えた、しっかりとした脇差姿。　地鉄は板目、所々流れてよく約み、細かな地沸がつき、肌に添って地景が沈む。

刃文は焼巾の広い互の目が連れて、刃中は長い足がよく入り、手元は足が刃先に抜けて、砂流しが交じり　沸がよくつく。

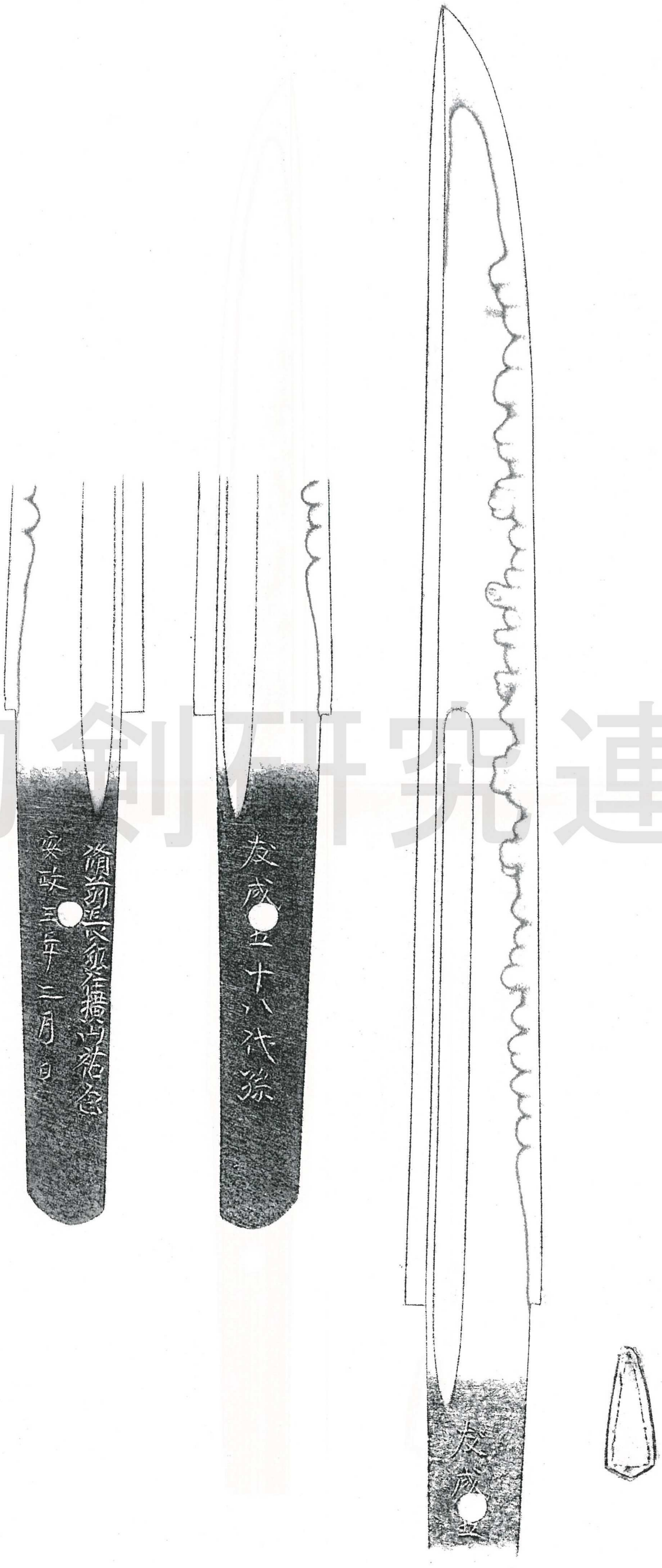
帽子　乱れて先は尖りかげんに返る。　彫刻　表裏に丸止めの棒樋に丸止めの添樋を長く掻く（丈比べ）。

茎は生ぶ、刃方を張らせかげんに先は入山形、　刃 小丸 ∩ ═ 棟 小丸 ∩ ═ 鑢は化粧鑢、磨出しは切で下は大筋違。目釘穴は一。銘は細鏨で表裏に切る。　地鉄はよく約んで無地鉄となり、刃文は沸が深く足がよく入っている。

刀剣研究連合会

短刀　備前長船住横山祐包
安政三年二月日　（一八五六）
友成五十八代孫

○備前　文久
横山祐盛の養子。
祐永の姉婿。
初代。
二代は友成六十代正統と切る。
東京板橋陸軍造兵廠にて打つ
明治。



平成二十八年五月二十二日　鑑定刀
刀長 29.5cm（九寸七分三厘）　反り 内反り 0.13cm（四厘）　元巾 2.87cm（2.65cm）
茎元巾 2.37cm　茎先巾 1.79cm　元重 0.73cm　茎先重 0.48cm　茎長 11.3cm（11.6cm）
茎重 0.80cm

平造、庵棟高く、重ねは厚く身巾の尋常な造込みとなり、先巾をやや落としてフクラは枯れる。棟角の反りは無く、刃長の延びに新々刀期の短刀姿となる。　地鉄は小板目に小杢交じりでよく匂み、微塵の地沸が厚くつき、細かな地景が底に沈む。　刃文は互の目に丁字、焼出しは浅く湾れる。刃中は足が入り、匂口は締る。帽子 直刃で先は丸く返りは長い。　彫刻 深い腰樋を表裏に掻く。
元巾と先巾の差は少なく、先は刃上り栗尻、刃角 ▔ 棟角 ▔ 茎は生ぶ、重ねは厚く、
勝手下り。目釘穴は一。銘は作者と年紀を表に切り、裏は「友成五十八代孫」と切る。　鎬は化粧鎬、磨出しは切び下は
祐包、祐永の一作風をよく表わした一振り。

刀剣研究連合会

短刀　兼先

美濃　文亀

「兼先」「濃州関住兼先」

善定　右衛門四郎

二代兼吉（永享）の子という。

別に赤坂千手院系に兼先がいて

善定兼重の門人になるという。

業物。

鑑定刀

同　二十八年五月二十二日

平成二十五年十一月十四日

刃長　23.0cm（七寸六分）　反り　内反り0.2cm（四厘）　元巾　2.11cm（1.97cm）　元重　0.65cm　茎長9.2cm（9.3cm）

茎反り　無し　茎尻巾　1.85cm（1.81cm）　茎先巾　1.47cm（1.46cm）　茎元重　0.60cm　茎先重0.42cm

平造、庵棟のおろしは急、重ねと身巾の尋常な造込みでフクラは枯れ　反りは内反りが僅かについた明応・永正頃

の短刀姿。

地鉄は小板目に流れた板目でよく約み、細かな地沸がつき地景が沈む。焼出し映りが鮮明に表われその先はやや

白ケて連続する。鉄色は青味があり明るく冴える。

刃文は直刃で小足が僅かに入り、匂口は締って冴え刃中は明るい。

帽子は直刃、先は丸く返りも直刃でやや長く焼く。

茎は生ぶ（少々区を送るか）肉置の良い丁寧な仕立て。少々残念なことに茎先を切捨てる。

刃　角小肉　棟　丸　鎬は　檜垣　目釘穴は一個、銘は棟よりに細鏨で右肩上りに

二字銘を切る。

鍛えが良く、締って直刃が明るく冴えた兼先の好短刀。

刀剣研究連合会